



No.30 令和3年度春号 -2021. 03. 27-
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌

मैत्री maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

ごあいさつ

皆さん、お元気でしょうか。まずは新型コロナに罹患された方、現在も苦しんでおられる方、不幸にして亡くなられた方々に、心よりの哀悼をささげたいと思います。こうしてこの「まいとりの」誌面で新年度に向けたご挨拶をするのが、私には信じられないくらい早く感じられます。それは言うまでもなく、長きにわたる covid-19 の影響で、単調な自粛生活を強いられたためでもあります。一方で、このパンデミックの中で世界がどのように変わってきたのか、また、学校や社会の新しい在り方とは何なのかを問い直す良い機会にもなりました。

宗教や人種の相剋と分断、マイクロプラスチックや二酸化炭素排出量が引き起こす気候変動、環境の悪化、貧困問題、私たちが抱える喫緊の課題は待ったなしで増大しています。これらの克服は仏教でいう個我を超えて衆生の抱える問題であり、同時に衆生こそが解決しうる問題でもあります。眼前にある日常の中で個として私たちに出来ることはたくさんあります。そのような課題を実感するこの頃であります。今年度も宜しく願いいたします。

東洋大学仏教会会長 渡辺章悟 (文学部教授)

この度、東洋大学仏教青年会会長に就任いたしました、森原康暉と申します。前任の板敷真純さんより、このような名誉ある役職を引き継ぎましたことを光栄に思います。まず、前会長のこれまでのご尽力に心より感謝を申し上げます。

ご承知のように昨年は新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、日常生活の多くの場面で今までにないような経験をする事となりました。東洋大学仏教青年会におきましても予定されていた活動の多くで変更を余儀なくされました。その一方で、Zoom 等のツールを用いたオンラインでの活動に多くの可能性を見出すことも出来ました。本年はそのような経験を活かし、仏教は現代社会の中でどのような意義を持つのか、考えながら活動を続けて参りたいと存じます。どうぞよろしく願いいたします。

新仏教青年会会長 森原康暉

こんにちは。仏教青年会会長の板敷真純です。いくらか寒気も緩み日差しも柔らかな季節になりました。みなさま如何お過ごしでしょうか。気がつけばコロナ流行から一年が過ぎました。しかし一年前と違うのは2月にコロナワクチンの接種が日本で始まったことです。仏教青年会も来るコロナ後の未来に向けて、さらに活気ある活動を目指したいと思っております。コロナウイルスの終息と皆さまの健康を心から願います。

この度、私板敷は東洋大学大学院を修了するため、3月末をもちまして仏教青年会会長を退任いたします。至らない点も多々あったと思っておりますが、先生方と会員みなさまのおかげで無事に一年間勤め上げることが出来ました。誠にありがとうございました。

後任の会長は森原康暉さんです。私も退任後は仏教会の会員として影ながらお手伝いが出来ればと思っております。今後とも東洋大学仏教青年会をよろしく願いいたします。

前仏教青年会会長 板敷真純



エジプトにおけるこの半年のコロナウィルスの状況

出野尚紀（ミスル科学技術大学外国語翻訳学部日本語学科）

筆者がエジプトのミスル科学技術大学外国語翻訳学部日本語学科（以下、ミスル大）に赴任してからおよそ半年となりました。この半年のエジプト10月6日市での生活とからめて、新型コロナウイルス情勢をまとめます。

まず、居住地であり勤務先もある10月6日市ですが、ナイル川から直線距離でおよそ30キロメートル西に中心地が位置する1979年から開発が始まったカイロの衛星都市です。市は細長い形をしていて、長い方の東西方向は40キロメートル以上あり、開発が進んでいる中心地はその東側になり、西側は砂漠につながっています。名称の由来は、エジプトでは1973年10月6日に始まった第四次中東戦争で勝利したことになっているからです。この町は、砂漠地帯に一から作られたため、整然としていて、幹線道路で大規模なショッピングモールや住宅地域が分かれていたりしますが、まだ開発は中途にありますから、空き地や建設途中の建物も多く見られます。なお、砂漠気候で、1月の半分以上の日で朝靄が出ていましたが、雨が降ったのは数ミリ程度のものが3回あっただけです。

エジプトの新型コロナの新規感染者は、在カイロ日本大使館のホームページ (https://www.eg.emb-japan.go.jp/itpr_ja/r_covid19.html) によると、到着した後の9月下旬から10月上旬にかけての時期がひとつの底で、1週間あたりの感染者数が800人を越える程度でした。それから気温の低下とともに増えていき、2020年12月27日から翌21年1月2日の週に9,563人まで増加しました。2月6日に509人まで減りましたが、中旬から月末にかけては600人台で推移しています。現在の死亡率はだいたい新規感染者の8パーセントぐらいかと思います。2月28日時点で感染した方の人数は181,829人で、10,639人がお亡くなりになりました。感染者数は日本の半分以下ですが、死亡者数は日本より1.3倍以上多くなっています。

身近な感染者ですが、非常勤も含めたミスル大日本語学科のスタッフ8人のうち、3人が感染しました。他の学科も含めると、ご親族にお亡くなりになった方がいる先生が何人もいらっしゃいます。オンライン授業だったので欠席にはなりませんでしたが、日本語学科の学生のなかにも感染した者がいました。また、2月末では、大臣のうち3人が療養中であるそうです。最近の男女比や発症者の居住地はわかりませんが、感染の多くは家庭内感染だと考えられます。中流以上の生活をしているエジプト人には、金曜日に一族が集まり礼拝に行ったり、夕食をともにしたりするという習慣を保っている人が多いので、一族のなかの誰かが保菌していると集まった親族に広がるパターンになります。

次にエジプト政府が行っている感染予防措置です。一応、公共施設の屋内への入場時や交通機関の利用時のマスクの着用が義務づけられており、2021年の1月3日から非着用の場合に罰金50ポンド（350円弱）を即時徴収することになっています。それらのなかでは、テロ対策としての荷物検査がありますが、入場時に体温を測るところもあります。ただマスクは着用の指示に従えば罰金の徴収をしないようなので、まだ罰金を取っているところを見ていません。マスクも同じように入り口でマスクのチェックをしており、ソーシャルディスタンスを取るようなどの掲示がなされています。近くに教会がないので実際に見ていませんが、同じ掲示物があるので、チェックしていると思います。カイロ都市圏の公共交通機関には、公社の地下鉄とバスのほかに、私営のバスがあります。地下鉄の場合は駅入り口の荷物検査場所に係員がいて注意しています。バスは料金を集める車掌がいるものもありますが、マスクの注意をしているところを見かけたことはありません。大学の



近くにあるエジプト最大のショッピングモールに2月初めに行ったときは、入り口で荷物チェックの他にマスクチェックと額に体温計をかざしての体温測定が行われていました。飲食店は、朝から日が変わるまで営業が許可されていますが、屋内では座席数を半分まで減らしています。飲食店以外でもモールや大企業の店舗では建物に入るときにマスクチェックが行われていますが、店舗の大きさが同じようでも個人経営の小売店ではそこまでの対策は取られていません。

普通に屋外を歩く人たちは、マスクをしていない人のほうが目立ちます。ショッピングモールでもなかに入ると、マスクを外して飲食をしながら歩いている人もいます。私営のバスはチェックがないこともあり、している人としていない人が半々くらいではないでしょうか。最近では、一般的にコロナ慣れなのか、マスクをする習慣がなかったからなのか、それとも金銭的問題かマスクをしない人が多いです。

ミスル大学の秋学期は対面とオンラインが隔週から始まり、12月より対面が月1回、12月末から試験以外はオンラインへと登校回数が減りました。12月末日には政府からの指示もあって、1月16日からは期末試験の予定がその日から2月20日まで長期休暇で以後に試験へと変わりました。その試験期間も2月13日に1月に連絡があった21日開始から28日開始と1週間遅くなりました。試験開始により学生が登校してきました。教室内ではマスク着用となり、アルコール消毒を時間ごとに行っていますが、屋外では学生・教職員ともにマスクを着用していない人を見られます。学内にマスク着用やソーシャルディスタンスの掲示はありますが気にはしていない人はほとんどなく、久しぶりの対面を喜んでいます。

最後に、2月28日よりエジプトでも年長者よりワクチンの接種が始まりました。



オランダのコロナ

鈴木伸幸（ライデン大学）

昨年の3月にパンデミックが始まってから、早いもので一年が経った。オランダは日本の九州と同じくらいの面積で、人口が1700万人の小さな国である。この国もコロナウイルス感染拡大の影響を受けて、社会のあり方が大きく変わってしまい、コロナ以前の生活がまるで別の国の遠い昔のように感じられるものである。

そもそもは2020年3月13日金曜日の朝10時くらいだっただろうか。いつものようにライデンの旧市街にある大学の校舎に向かって歩いていくと、大学方面から大学生が引き返してきたことを不思議に思ったことを覚えている。閑散とした大学図書館でパソコンを開きメールを確認すると、今後予定されている授業やテストは全てキャンセルといった内容のメールが届いていた。オランダは他のヨーロッパ諸国と比べると、感染者が発見されるのが遅かった国であり、それまでは日常生活に何の変化もなかった。これはオランダでもいよいよ新型コロナウイルスが猛威を奮い始めたことを肌で感じた最初の出来事であった。

次いで同23日には、オランダのルッテ首相が自ら名づけるどころの「インテリジェント・ロックダウン」に突入した。およそ一ヶ月半に及んだオランダ独自のロックダウンは、他国のものに比べると緩やかであったと言えるだろう。可能な限りの在宅勤務、イベントの全面禁止、博物館やスポーツ施設などの閉鎖、飲食店の休業（テイクアウト可）、学校閉鎖とそれに伴うオンライン授業、成人は3人以上の集団形成の禁止、美容やセラピーなど身体の接触を伴う店舗の閉鎖、外出先での1.5メートルのソーシャルディスタンスの確保などが示されていた。これらの制限はそれなりに不自由な縛りではあったが、より厳しいロックダウン状態にある他の国々の様子を見たためなのか、この時点では、オランダの人々は驚くほどよく守っていたと思う。そして治安が乱れることはほぼなかった。

他国の傾向と同じように、夏にかけてオランダ国内の感染者の数は減り、制限が緩和されて、街には感染拡大前とほぼ変わらない活気が戻った。しかし、9月の新学期が始まった頃から再び感染者が増え始め、一日5,000人を超える日が続くようになってきた。それを受けて9月29日から再びロックダウンが宣言され、オランダ全土の飲食店や文化施設、スポーツ施設が閉鎖された（飲食店でのテイクアウトは可）。この日以降、これらは今日（2021年2月27日現在）まで再開していない。さらに感染者は増え続け、一日あたり10,000人を超える日々が続くようになった。これを受け、12月15日からは、生活に必須でない小売店の閉鎖が発表され、スーパーマーケット、パン屋、精肉店など、生活必需品を扱う店のみ通常通りの営業が許可されている。この頃から人々の不満が高まり始め、各地で政府のコロナ政策に反対するデモや暴動が目立つようになってきた。

このような措置は一月中旬までと当初はアナウンスされていたが、イギリス変異株の流行によってさらに厳しくなった。これまでの措置の継続に加え、2021年1月23日から今日に至るまで罰金(95ユーロ)付きの夜間外出禁止令が出されており、午後9時から午前4時30分までの間、特別な理由以外の外出が禁止されている。ただし、犬の散歩による外出は許可されているのがオランダらしい。

しかし、一方で感染のピークを超えたと判断されたため3月3日から徐々に制限は緩和に向かうようである。3月3日から、生活必需品以外の小売店では予約した上での来店が許可される予定である。ただし、1フロアに同時に2名までの来店しか認められない。スポーツに関しては、26歳以下の人々に限り、2名以上でスポーツ施設の屋外でスポーツをすることが認められるようになる。美容やセラピーなど身体の接触を伴う業種は予約と感染対策をした上での営業が許可される。オランダではワクチン接種が1月初旬から始まっていて明るい兆しは見えているが、直近でも連日4,000~5,000人程度の感染者が報告されている。今後また厳しい措置が取られる可能性があり、先行きは不透明である。



参考までに、現在の日本とオランダのフライトの状況であるが、KLMは成田-スキポール、関空-スキポール間ではほぼ通常通りの運行をしている。2月1日までは日本は安全な国として認められており、日本人は事前のPRC検査なしにオランダに入国できていた。しかし、1月28日に欧州理事会が日本での感染拡大を受けて、EUへの渡航が認められる安全な国から日本を除外するとの勧告を発表した。これを受け、1月30日、オランダ政府は、オランダへの入国が認められる安全な国から日本を除外することを決定した。そのため、2月2日以降、EUの滞在許可を有する人や特定の職業の人以外は、オランダへの渡航ができなくなっている。さらに、オランダに渡航する場合、オランダ到着の72時間前以降に受けたPCR検査の陰性証明と、フライト搭乗の4時間前以降に受けた迅速検査（抗原検査等）の陰性証明が必要である。自由な国として知られるオランダであるが、自由なオランダへの旅行はまだしばらく厳しい。

○《書籍情報》

・『教えを信じ、教えを笑う』
村田みお・石井公成 著（臨川書店、2020年2月、2,800円＋税）
昨年、仏教の実践行為に光を当てた画期的なシリーズが刊行された。ここに紹介するのは芸術や写経、あるいは芸能や酒と仏教の関係を扱った上記の書で、船山徹編「シリーズ実践仏教」全五巻の第四巻にあたる。第一章は「写経と仏画—わが身で表す信仰—」第二章は「酒・芸能・遊びと仏教の関係」からなる。

・『デジタル学術空間の作り方』
下田正弘・永崎研宣 編（文学通信、2019年、2,800円＋税）
現代の仏教研究に必須となったデジタル学術空間をつくることにかかわってきた16名の研究者の細心の論文をまとめたもの。仏教学の抱える問題を様々な角度から追究しながら、次世代人文学のモデルを提示しようという試みで、人文学の展開にはこのような新たに生まれつつあるデジタルの学問的知識との対話が、不可欠となっている。

・『南アジア I マウリヤ朝～グプタ朝』（アジア仏教美術論集）
宮治昭・福山泰子 編（中央公論美術出版、2020年、5,800円＋税）
本書は「アジア仏教美術論集」（全12巻）の第一巻であり、国内外の第一線の研究者21名が執筆しているが、このうち半数は海外の学者が寄稿した論文を日本語訳したものである。仏教学・考古学・歴史学・宗教学と関連した、多様で豊潤なアジアの仏教美術に新たな光を当てる秀作である。

・『両界曼荼羅の源流』
田中公明 著（春秋社、2020年、3,000円＋税）
胎蔵・金剛界の両界曼荼羅の成立過程をインドに遡って解明。あわせてインドの後期密教や日本で独自に発達した浄土や神道系の曼荼羅も紹介した、格好の曼荼羅の入門書。2004年の『両界曼荼羅の誕生』を最新の画像と研究成果を反映させ大幅リニューアル。

・『大蔵経の歴史—成り立ちと伝承—』
宮崎展昌 著（方丈堂出版、2019年、3,200円＋税）
仏教を学ぼうとする初学の学生、仏教学を研究しようとする大学院生たちが、まず本書を通読することで文献研究の基礎知識を得るとともに、釈尊の教えが伝えられてきた歴史を理解し、地に足の着いた研究を進めることにつながれば、本書の目的が達せられたといえる。（中尾良信「緒言」より）あとがきより

・『思考禅のススめ—仏祖の言葉を読んでみよう』
岡島秀隆 著（北樹出版、2021年、1,500円＋税）
【目次】
第1章 ホトケの言葉サマザマ
第2章 ココロに残るホトケの言葉
第3章 ココロを映すホトケの言葉
第4章 禅と自然
第5章 アクティブラーニングとしての禅問答
第6章 禅と世界の絵本—言葉のコラボレーション
第7章 禅と現代の哲人—エリック・ホッファーのアフォリズム
おわりに
出典・人物/解説

・ *My Heart Sutra: A World in 260 Characters*
Frederik L. Schodt 著
（Stone Bridge Press, 2020, 1,846yen+tax）

The Heart Sutra is the most widely read, chanted, and copied text in East Asian Buddhism. Here Frederik L. Schodt explores his life-long fascination with the sutra: its mesmerizing mantra, its ancient history, the emptiness theory, and the way it is used around the world as a metaphysical tool to overcome chaos and confusion and reach a new understanding of reality—a perfection of wisdom. Schodt's journey takes him to caves in China, American beats declaiming poetry, speculations into the sutra's true origins, and even a robot Avalokiteśvara at a Kyoto temple. (Amazon Japanより引用)

○《イベント》

・聖徳太子1400年遠忌記念 特別展「聖徳太子と法隆寺」
令和3年（2021）は聖徳太子の1400年遠忌にあたり、これを記念して特別展「聖徳太子と法隆寺」を開催します。会場となる奈良国立博物館と東京国立博物館では、法隆寺において護り伝えられてきた寺宝を中心に、太子の肖像や遺品と伝わる宝物、また飛鳥時代以来の貴重な文化財を通じて、太子その人と太子信仰の世界に迫ります。特に金堂の薬師如来像は日本古代の仏像彫刻を代表する存在であり、飛鳥時代の仏教文化がいかに高度で華麗なものであったかを偲ばせてくれます。本展覧会は1400年という遙かなる時をこえて、今を生きる私たちが聖徳太子に心を寄せることでその理想に思いを馳せ、歩むべき未来について考える絶好の機会となることでしよう。

日時：7/13（金）～9/5（日）9:30～17:00（入館は閉館の30分前まで）
観覧料：一般1200円 大学生600円 高校生400円 中学生以下無料
会場：東京国立博物館
（東京都台東区上野公園13-9）

・特別展「国宝 聖林寺十一面観音 — 三輪山信仰のみほとけ」
奈良県桜井市にある聖林寺の国宝十面観音菩薩立像は天平彫刻の名品で、日本を代表する仏像の一つです。法隆寺の国宝 地藏菩薩立像などとともに、江戸時代までは同市の大神神社に付属する寺（大神寺、後に大御輪寺に改称）にありました。大神神社は本殿を持たず、三輪山を拝む自然信仰をいまに伝えますが、奈良時代には仏教の影響を受けて神社に寺や仏像がつくられました。この展覧会では、大御輪寺にあった仏像や、大神神社の自然信仰を示す三輪山禁足地の出土品などを展示します。十一面観音菩薩立像が東京で展示されるのは初めてです。比類ない美しさを御覧ください。

日時：6/22（火）～9/12（日）9:30～17:00（入館は閉館の30分前まで）
観覧料：一般1200円 大学生600円 高校生400円 中学生以下無料
会場：東京国立博物館 本館特別5室
（東京都台東区上野公園13-9）

・千四百年御聖忌記念特別展 「聖徳太子」
聖徳太子（574～622）は、推古天皇の摂政となり国の礎を築く一方で、仏教を篤く信奉し、日本の仏教の出発点となった人物です。後世には聖徳太子への信仰が生まれ、諸宗派の名だたる高僧、貴族から庶民に至るまで、人々の尊崇を集めてきました。本展は、聖徳太子が没して1400年を迎えることを記念し、大阪・四天王寺のご協力のもと、その生涯をたどりながら、現代まで続く信仰の広がりを数々のゆかりの名品によって紹介するものです。

日時：11/17（水）～1/10日（月）10:00～18:00
（※当面の間は金・土も18:00まで、いずれも最終入館は閉館30分前まで）
会場：サントリー美術館
都港区赤坂9-7-4 東京ミッドタウン ガレリア3F）

《語学勉強会》

○サンスクリット文献勉強会
講師：松村淳子
日時：参加者と具体的な日程を決定
参加希望者は梅田愛子<lovec777@gmail.com>にお尋ね下さい。

○チベット文献勉強会
講師：現銀谷史明
日時：参加者と具体的な日程を決定
参加希望者は現銀谷先生<kamif2t@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

○仏教漢文勉強会
講師：佐藤厚
日時：参加者と具体的な日程を決定
参加希望者は佐藤先生<sato_inbuds@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。